

出羽三山信仰と秋田

岩 鼻 通 明

はじめに

大学院の修士論文作成以降、ほぼ三〇年余りも出羽三山信仰の地理学的研究を続けてきた。その間、三冊の著書を上梓することができた。^①その際に立脚点として、心がけてきたことがあった。

ひとつは、従来の出羽三山信仰研究は、羽黒修験道の宗教学的研究が中心であり、いわば修験者の立場からの研究であった。しかしながら、出羽三山信仰を支えてきたのは、修験者のみならず、広い範囲に拡がる信者の組織化があつてこそで、両者の相互的關係から、出羽三山信仰は成立しているのであり、信者側の視点から広域的な地域調査が必要であるとの認識から出発した。

もうひとつは、近世の出羽三山は「八方七口」の別当寺が同等の祭祀権を有していたのであるが、それぞれ個別に調査研究が行われていたため、それらを総体として考察し、かつ客観的に分析する視点が必要であると認識した。その両方の視点から調査研究を進めてきた。

ただ、近年は自身の研究テーマを韓国地域研究および映画を通じた地域活性化研究へと大きく変えたこともあつて、出羽三山信仰に関わる近年の変化などに言及することによつて、与えられた論題に代えさせていたきたい。

一 広域信仰圏の縮小

出羽三山は東日本一円に広大な信仰圏を形成してきた。この信仰圏は、三山山麓の宿坊の山伏が信仰圏内の信者を組織

化することによって維持されてきたのだが、信者の高齢化や都市化にともない、信仰圏が縮小ないし希薄化しつつある。信者の高齢化だけでなく、信仰が若い世代に継承されないといった問題も生じてきている。

また、三陸沿岸部は、古来、出羽三山の有力な信仰圏であったが、東日本大震災で甚大な被害を受けたことも影響しているとみられる。羽黒山頂の霊祭殿には、震災犠牲者の供養塔が建立されている。

元来、山岳信仰は豊作をもたらす水源の神として農民の篤い信仰を集めてきたが、農村の都市化や農家の兼業化の進展によって、信仰の基盤が失われつつある。

近年は、パワースポットや山ガールなどのブームによって、参詣者や登山者が増加している例も散見されるが、信仰の山から観光の山へと変化せざるをえない時代といえよう。近世の月山登拝口は「八方七口」と称されたが、新たに「新八方十口」と名づけた周辺市町村の観光振興の連携も模索されている。

二 秋田県における出羽三山信仰

興味深いことに、湯殿山の史料上の初見は、戦国大名の佐竹氏の起請文である。それに加えて、常陸国南部に江戸初期の湯殿山碑が数多く存在することから、湯殿山と常陸国との

密接な関わりが指摘されてきた。³⁾

ただ、なぜ山形県から遠く離れた茨城県で湯殿山信仰が早い時期に浸透したのかは、いまだに説明されていない。また、佐竹氏の秋田入部にもない、湯殿山信仰が、どのように秋田へと、もたらされたのかについても定かではない。

さて、秋田県における出羽三山信仰の特徴的な面は以下の三点といえよう。ひとつは由利郡における女性の羽黒山参りである。羽黒山は前近代においても女人禁制ではなく、五重塔の脇に存在した血の池で越中立山と同じく女人救済儀礼として血盆経奉納が行われていた。⁴⁾

二〇一四年九月二十一日に、富山県立山町で再現された布橋灌頂儀礼を現地で見学することができたが、これほど大規模な儀礼ではなかったとしても、女性が直接に血盆経を血の池へ奉納できた羽黒山の事例は近世の庶民信仰を具現化したものとして貴重である。

もうひとつは、農閑期の伊勢参宮の途上での羽黒山参りである。月山と湯殿山は女人禁制かつ夏の開山期しか参詣できなかったが、里山である羽黒山は一年中、参詣者に開かれていた。かつて、雪の積もった石段を山頂まで登ることを試みたことがあったが、不可能ではなかった。北東北からの伊勢参宮道中日記には、しばしば羽黒山に参詣に立ち寄った記述がみられる。

最後に、鉾山労働者の信仰を集めたのが、西村山郡西川町の本道寺のすぐ東に位置する八聖山である。明治の神仏分離以降は金山神社と称しているが、近世には本道寺の末寺であり、秋田県内の鉾山労働者の信仰は今も続いている。

三 即身仏

ついで、即身仏に言及しよう。この課題は私の専攻する地理学から最も遠いものといえるのだが、湯殿山の石碑の分布との関連から問題提起を行った拙稿^⑤は波紋を投げかけたものの、従来の見解とは、あまりに議論が込みあわなかった。

しかしながら、その後収集した江戸時代の出羽三山参詣道中日記の分析から、越後国寺泊の弘智法印の即身仏を拝観する参詣者は多かったのに比して、出羽三山参詣において、即身仏はほとんど信仰の対象となっていないことが判明したのは、先の問題提起を補強したものと考えたい。近年は山澤学氏によって、湯殿山行人に関する史料を踏まえた調査研究が精力的に進められており、その実態が解明されつつある^⑥。

なお、秋田との関わりでは、菅江真澄が天明四年（一七八四）九月十九日の日記において、即身仏の評価に触れている。当時既に存在していた湯殿山系の即身仏である酒田の海向寺の忠海上人および東岩本の本妙海上人の即身仏を、弘智法印

には及ばないと明言していることは興味深いものがあり、当時の世評を反映したものと理解できよう。以下に日記から当該箇所を引用しよう。

「七日町やどつきたり（中略）あるじのものを語を聞ば、この里の開口寺、又岩本といふ村のみてら、此ふたところに、越後の国野積の山寺にて、「墨絵にかきし松風の音」とよみ給ひてけるにひとしき、いきばさち（生菩薩）もおましませりと聞えたり。こはみな、木の葉、草の実をくひものとしてをはりをととりて、なきがらのみ世にとゞめたる也けり。しかはあれど、弘智大とこには、をよばざりき」^⑦。

旧論では、いささか誤解していたのであったが、菅江真澄は鶴岡の宿で主人から、当地の即身仏について伝聞したのであり、全集の脚注にも記されているように、実際には拝観していなかったと思われる。当時に「生菩薩」という表現が使われていたことは興味深い。

四 出羽三山信仰と鳥海山信仰

出羽三山の縁起でも、かつて三山のひとつに鳥海山が含まれていたことを示すものがみられるが、立山と白山との関係と同様に、月山と鳥海山には共通する地名や伝承などが散見する。

たとえば、近世の月山で天台宗と真言宗の境界となった「装

東場」という地名が、鳥海山にも存在し、その場所はおそらくは宗教上の境界であったことを論じた。現在でも、県境線は鳥海山の山頂より北側へ、はみ出すように引かれているが、これは近世の宗教上の境界を反映したものとみてよからう。

これまでは、出羽三山信仰と鳥海山信仰は別の次元で、調査研究されることが多かったが、両者の比較研究が今後の課題となろう。

五 文化財保存

出羽三山は山形県の推進する世界遺産登録の中核に位置付けられ、筆者も山形県の世界遺産に関わる委員会の委員となつて、この運動に取り組んできた。

ただ、途中から出羽三山に代わつて最上川が登録の中核となつたのであるが、文化庁の暫定登録リストから外れ、知事が交代したことから、世界遺産登録は棚上げされることとなつた。

その一方で、最上川を重要文化的景観として重要文化財指定をめざす試みは継続され、二〇一一年度末に報告書が刊行されるに至つたが、指定には、まだ数年以上を要すると思われる。

その過程で、鳥海山における文化財登録に進展はみられた

ものの、一方で出羽三山に関わる文化財登録が十分とはいえないことが明らかになった。たとえば、羽黒山の門前町である手向集落に立ち並ぶ茅葺き屋根の宿坊の街並み景観は、重要文化財の一角を占める重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けるに十分な資格を有していた。

実際に、一九九〇年代に街並み調査が実施されたものの、指定に向けた動きはみられないまま、現在に至っている。その間に、貴重な茅葺き屋根の景観は櫛の歯が抜けるように減少しつつあり、今はわずか四軒を数えるのみという。宮城県村田町の蔵の町並みの指定により、東北六県で、伝統的建造物群保存地区の指定が皆無であるのは、ついに山形県のみになつてしまった。

それもあって、旧羽黒町を含めて広域合併した鶴岡市では、新たな街並み保存に向けた取り組みを始め、通称歴史まちづくり法に基づく「鶴岡市歴史的風致維持向上計画」を策定し、山形県内初の認定を二〇一四年に受けた。実施計画期間は二〇一五年度からの十年間であり、重点地区に門前町手向が含まれていることから、今後の保存修景と活用が期待される。

六 神仏分離

研究上の取り組みが、いまだ困難な側面を有しているの

が、神仏分離の実態解明といえよう。神仏習合であった霊山が、明治初期に神道と仏教に二分されたまま、現在に至っている。古来の羽黒修験道の秋の峰入り修行もまた、神道と仏教に分かれて、それぞれ別個に実施されている。

新世紀を迎えて、高齢化や第一次産業人口の減少にともなう信仰の変化も大きく、いわば神道と仏教が一体となつての出羽三山信仰の立て直しが必要な時期を迎えているといえよう。

前述の世界遺産登録運動も、それによつて観光客の増加を期待する部分があり、昨今のパワースポットのブームなどは、おそらく一過性のものに過ぎないであろう。毎年八月下旬に実施される羽黒修験の峰入り修行は多くの参加者を集めてはいるものの、それが信仰を広めることにさほど貢献していない状況にあるといえよう。

修行の動機が布教ではなく、自己鍛錬的なものに変容しているからであり、それはやむをえない情勢かもしれない。かつては峰入り修行に参加することによつて修験の資格を得た宗教者が信仰の拡大に寄与してきたのであるが、現代においては両者が有機的に結びついていない。

宗教者にとつて、百年以上が経過した今でも、神仏分離のわだかまりは消えてはいないようであるが、出羽三山信仰の将来像にとつても、神仏分離を歴史的に位置付ける作業が必

要な時期に来ているのではなからうか。

近年の研究動向として、三山神社第二代宮司の子孫による論考がWEB上に発表されており、当方の研究室所属の大学院生の手による論文も公表されていることから、今後の新たな展開が期待される^⑩。

おわりに

秋田県内にも、ローカルな山岳信仰が存在し、それらは出羽三山信仰や鳥海山信仰と重層的な構造を有している。それらの関係を地理学の立地論的立場から解明することが課題として残されている。

村落共同体の内部には、様々な宗教的講集団が組織化されており、それらの空間的相互関係を検証していくことによつて、重層的な山岳信仰相互間の空間構造が明らかにされることを期待して、結びに代えたい。

注

(1) 拙著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版、一九九二年。『出羽三山の文化と民俗』岩田書院、一九九六年。

『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院、二〇〇三年。

(2) 拙稿「朝鮮半島と東北文化の歴史的交流」山形県地域史研究三十二、二〇〇七年。拙著『韓国・伝統文化のたび』ナ

究二十一・二十二、二〇一三年。

カニシヤ出版、二〇〇八年。拙稿「被災地をめぐる現代民俗―映画館の観客アンケートを通じた試論」村山民俗二十七、二〇一三年。

(3) 拙稿「常総・寛永期の大日石仏」の刊行によせて、村山民俗十七、二〇〇三年。

(4) 拙稿「旅日記にみる羽黒山の女人救済儀礼」村山民俗十三、一九九九年。

(5) 拙稿「湯殿山即身仏信仰再考」歴史手帖十三―八、一九八五年(拙著「出羽三山信仰の歴史地理学的研究」名著出版、一九九二年、所収)

(6) 山澤学「湯殿山山籠木食行者鉄門海の動化における結縁の形態」(地方史研究協議会編「出羽庄内の風土と歴史像」雄山閣、二〇一二年。

(7) 「菅江真澄全集 第一巻」「あきたのかりね」所収、未来社、一九七一年。

(8) 拙稿「鳥海山の境争論と装束場」山形民俗二十二、二〇〇八年。「宗教と境界―飯豊山・鳥海山・蔵王山を事例として」地図情報一一六、二〇一一年。

(9) 拙稿「出羽三山と最上川が織りなす文化的景観まんだら」庄内民俗三十四、二〇〇八年。「山形県と世界遺産」村山民俗二十三、二〇〇九年。

(10) 渡部功「出羽三山における神仏分離」山形鶴翔同窓会HP、二〇一一年。難波耕司「出羽三山の神仏分離」宗教民俗研